

第3回 絵画に見る庶民生活 ―中世の暮らしの風景―

下坂 守

20210811

はじめに

- 一、町・村の風景 ―木戸と狭間(さま)―
- 二、風呂と湯屋 ―浴所の「法螺貝」―
- 三、町行く人びと ―被衣・扇・子供・武士・僧侶―
- 四、被り物とはきもの
- 五、旅と巡礼と閑所
むすび

一、町・村の風景 ―木戸と狭間(さま)―

- 1 「嚴助大僧正記」天文十三年(一五四四)七月九日
七月九日、大洪水。京中の人馬数多く流失す。在家・町町の釘抜・門戸ことごとく流失す。四條・五條の橋、祇園の大鳥井、流失す。

- 2 「川角太閤記」
京中町近くなりしかば、齋藤内藏助町あたりにて下知(げじ)の様子は、いつもの如く、くぐりはあき候てこれあるべく候。戸びらを押し明けよ。くぐりまでにては、幟(のぼり)さし物かまふべきぞ。其のうへ、人数くり入るゝ事、はかゆき申すまじく、町々の戸びら押しひらけよ。

二、風呂と湯屋 ―浴所の「法螺貝」―

- 3 「朝鮮通信使・朴瑞生の帰国報告」(「世宗実録」一四二九年、来日)
日本人は「沐浴潔身」をたいそう好む。金持ちの家には家ごとに「浴室」があり、また、町や村には「浴所」がたくさんある。そこではお湯がわくと「角」を吹いて報せる。それを聞くと人々は争って銭を払い入浴にやってくる。

- 4 「日本教会史」(ジョアン・ロドリゲス著)
大衆浴場があつて、そこでは一人の男が、法螺貝(ほらがい)を吹いて人々に呼びかけて、日本人のひじょうに好きな入浴をすすめている。

- 5 「臥雲日件録」享徳三年(一四五四)三月十五日
聖寿寺坊主来、因話京中盜賊、古今無比類(中略)昨日、鹿苑院主説、而告之曰、盜賊中有隱語、曰止湯、曰合沐、曰銭湯、々々者不論貴賤、各領所盜、曰合沐者、諸賊等分其財、曰止湯者、不論多少、所盜歸賊中首也

6 「言国卿記」 文明六年閏五月十三日

在所

一 此方ノ風呂ヲ(正)トメ、此方人数入了、予も入也

(五月十七日)

一 暮程ニ坊人数、此方ノ数カウモクニ、(合沐)此方ノ風呂アリ

(六月十五日)

一 自此方、近所風呂ヲ(正)トメ、二位此方人数入了

三、男女・子供の外出風景

7 「言継卿記」大永七年(一五二七) 三月二十八日

法印嵯峨見物つかまつりたく候と申され候間、同道つかまつり候、中御門亞相、老父、

四条中将、予、東向、もん一、女房衆茶阿、法印同宿三人、廿人ばかり上下あり、

釈迦堂へまず参り候

8 「言継卿記」大永七年(一五二七) 四月六日

予、法印同道つかまつり候て伏見へ下り候、歩行、老父興、供竹寿丸、坂田孫左衛門、
沢路源次郎、雑色、駕籠かき等まで十人、予、供虎千代、雑色

9 「言継卿記」大永七年(一五二七) 七月十日

暮々中御門女房衆、四条・此方女房衆、禁中の月見に参られ候

10 「物くさ太郎」

辻取とは、男もつれず、輿・車にも乗らぬ女房の、みめより、わが目にかゝるをとる事、
天下の御ゆるしにて有るなり

11 「祇園社執行宝寿院祐雅申状」文禄四年(一五九五) 四月 『八坂神社文書』一一五九号

殊更天下太平にて、諸大名衆御在京ニより、参詣人もおゝく御座候へハ、社徳も過分に御座候、取申様子ハ御神楽まいり候へハ、一ツニ付はいふん、年中ニ積候へハ、過分ニ御座候事 (中略)

一 洛中うふ(産)子の名をつけ、御はつを(初尾)取申、それならず、太刀・かたな、
絹・綿、不慮に取申候事

四、被り物とはきもの

12 「ルイス・フロイス著『日欧文化比較』」

ヨーロッパではわずかに足の中程しかない履物を履いていたら物笑いになる。日本ではそれは立派なことで、完全なものは坊主と婦人と老人のものである。

13 「ルイス・フロイス著『日欧文化比較』」

われわれの間では足を全部地につけて歩く。日本では、足の半分は履物の上で足の先

だけで歩く。

14〔信長公記〕 天正元年（一五七三） 八月

去程に 信長 年来御足なかを御腰に付させられ候、今度刀根山に而、金松又四郎武者一騎山中を追懸、終に討止、頸を持参候、其時、生足に罷成、足ハくれなゐに染て参り候御覽し、日比御腰に付させられ候御足なか、此時御用に立られ候由御詫候て、金松に被下、且冥加の至り面目の次第也

15〔翁草おきなぐさ〕（神沢杜口かんざわ とこう著、安永元年一七七二）

軍中の履物の事、（中略） 戦ひにては皆足半を履く事也、其所以は働の間に草鞋の中へ土砂入て働の碍と成る也、仍て各足半を履く事也

16〔走 衆故実〕

一（略） 烏帽子（かけハ心のまゝ也）、上下にて、引をさし太刀をはき、かへしも、だちをとりて参

17〔伊勢貞興返答書〕

公方様御小者六人にさたまり候

18〔御供故実〕

一 御供之時、馬上にて返しも、だちの事、嵯峨・鞍馬・高雄杯へは御とりあるべし
一 常の御供の時、指而遠く候はずハ、中間・小者、返しも、だちはとり候間敷、乍去中間ハ不苦候（中略）

一 御前など又ハ晴の時、刀ニ火打袋さげ候事、若方々ハ有間敷事二候、四拾以後さげ申候由候、四拾以後ハ、御前へもさげ申候、但御給二候得バ、わかき人々も不苦候、年寄候とも晴のときハ斟酌可然候、

19〔人賢記〕

敷革と申ハ鹿の皮にてこしらへ様、寸法等有之、又ひきしきと申ハ、常に付候を申候也、豹のかわハ、平人は斟酌之事二候、三職ハ御用候、ひきしきハ寸法も候ましく候敷、狛の革たるへし、又熊の皮をは、むかしハ弾正官の人ならてハ、御用無之候

20〔走衆故実〕

各敷皮を敷、太刀を左の膝の上に置、足半をバぬぎて、敷皮の下に其まゝはくように置

21〔鳥板記〕

一 辻堅之事、御通ある横小路の方をけいこする也、その方に幕をはりて居るもの也、そのときの幕のはりやうの事、御とをりある方にまくくしをたて、その御通ある

方に、しきかは敷、太刀を持居る也、太刀を左のひさの上におきて居る也
扱主人御通のとき、まくもあけ、太刀をしきかの上に置、敷皮より降りて、か
うへを地につけて通し申也、御通あつて頓て本のことくゐるなり、御供の衆のと
きは、しきかわの上に居へし、そのまくのはりやうはそとをけいこの故也

22〔走衆故表〕

一長こゆひのゑぼしにて走に參勤例事、慈照院殿様御代にも、藤民部殿十六歳に
て被召加候て、長こゆひにて久敷祇候

五、旅と巡礼と関所

23〔島津家久公御上洛日記〕天正三年（一五七五）

宿を出行に、関五、六程をよきて、へんとを行に、右方にかまち（蒲池）殿の城有、亦
行て関有、関守余せきもちりあまりにきひしくいかり、無理をはたらく間、召めしつれたる烈たる族とも関守
を打なやまし、此方ハおの／＼何事なく通り

ルイス・フロイス著『日欧文化比較』（大航海時代叢書XI）、岩波書店）

第一章 男性の風貌と衣服に関すること

54 ヨーロッパでは男が扇を携え、それで煽いだなら、それは柔弱なこととされよう。日
本ではいつもそれを帯にさして携え、使用しないものは、下等で、賤しいものである。

70 ヨーロッパではわずかに足の中程しかない履物を履いていたら物笑いになる。日本で
はそれは立派なことで、完全なものは坊主と婦人と老人のものである。

71 われわれの間では足を全部地につけて歩く。日本では、足の半分の履物の上で足の先
だけで歩く。

第二章 女性とその風貌、風習について

1 ヨーロッパでは未婚の女性の最高の荣誉と貴さは、貞節であり、またその純潔が犯さ
れない貞節さである。日本の女性は処女の純潔を少しも重んじない、それを欠いても、
名誉も失わなければ、結婚もできる。

6 ヨーロッパの女性は頭の装飾のために髪飾具を使う。日本の女性はいつも髪に何も付

- けない、また貴人の女性は髪を束ねない。
- 7 ヨーロッパの婦人は髪を下まで編んでリボンで結ぶ。日本の女性は髪を後の一箇所だけ紙の小片で結ぶ。あるいは一本の紙の糸を使って頭の中央に捲く。
- 8 ヨーロッパの女性は頭に白頭巾、または紗を冠る。日本の女性は屑綿で作った綿帽子または白い布の切れをマントの下に冠る。
- 9 ヨーロッパの女性はその家の中で髪や頭を洗う。日本の女性は公衆浴場で洗う。そこには特別の髪の洗場がある、
- 11 ヨーロッパの女性は美しい整った眉を重んじる。日本の女性は一本の毛も残さないように、全部毛抜で抜いてしまう。
- 12 ヨーロッパの女性は額を白くするために化粧品を塗る。日本の高貴の女性は正装をする時、額に黒い塗料をいくらか塗る。
- 13 ヨーロッパの女性は短い年月で髪が白くなる。日本の女性は油を塗るために六十歳になっても髪が白くならない。
- 14 ヨーロッパの女性は耳朶に孔をあけ、そこに耳飾りをはめこむ。日本の女性は耳朶に孔もあけないし、耳飾りもつけない。
- 15 ヨーロッパでは、顔の化粧品や美顔料がはっきりと見えるようでは、不手際とされている。日本の女性は白粉を重ねれば重ねる程、一層優美だと思っている。
- 16 ヨーロッパの女性は歯を白くするために手をつくし、手段を講ずる。日本の女性は鉄と酢を用いて、口と歯を「原文欠」のように黒くすることに務める。
- 17 ヨーロッパの女性は腕に金銀の腕輪を付ける。下の高貴な日本婦人は細い糸を五、六回巻きつけている、
- 18 ヨーロッパの女性は首に宝石や金鎖をつける。日本の異教の女性は何も付けない。キリシタンの女性は聖物匣シロカイロまたは念珠ロザリオ・デ・コンタスを付けている。
- 19 ヨーロッパの女性は、その袖が手首にまで達する。日本の女性は、腕の半ばまで達する。そして胸や袖を露出することを不面目のこととは思わない。
- 20 われわれの間では女性が素足で歩いたならば、狂人が恥知らずと考えられる。日本の女性は貴賤を問わず、一年の大半、いつも素足で歩く。

- 21 ヨーロッパの女性は帯をきわめてきつく締める。日本の高貴の女性はたいそう緩くしめるので、いつも垂れ下がる。
- 22 ヨーロッパの女性は宝石のついた指輪その他の装身具を付ける。日本の女性は一切指輪を付けず、また金、銀で作った装身具も用いない。
- 29 ヨーロッパでは夫が前、妻が後になって歩く。日本では夫が後、妻が前を歩く。
- 30 ヨーロッパでは財産は夫婦の間で共有である。日本では各人が自分の分を所有している、時には妻が夫に高利で貸し付ける。
- 31 ヨーロッパでは、罪悪については別としても、妻を離別することは最大の不名誉である。日本では意のままにいつでも離別する。妻はそのことよって、名誉も失われない、また結婚もできる。
- 32 汚れた天性に従って、夫が妻を離別するのが普通である。日本では、しばしば妻が夫を離別する。
- 33 ヨーロッパでは親族一人が誘拐されても一門全部が死の危険に身をさらす。日本では父、母、兄弟がそのことを隠し立てして、軽く過ごしてしまう。
- 33 ヨーロッパでは娘や処女を閉じ込めておくことはきわめて大事なことで、厳格におこなわれる。日本では娘たちは両親にことわりもしないで一日でも数日でも、ひとりでも好きな所へ出かける。
- 35 ヨーロッパでは妻は夫の許可が無くては、家から外へ出ない。日本の女性は夫に知らせず、好きな所に行く自由をもっている。
- 36 家族のもの男性および女性の恋人は、ヨーロッパではたいそう重んじられるが、日本では極めて軽んぜられ、互いに見知らぬもののように扱う。
- 38 ヨーロッパでは、生まれる児を墮胎することにはあるにはあるが、滅多にない。日本ではきわめて普通のこと、二十回も墮した女性があるほどである。
- 39 ヨーロッパでは嬰兒生まれてから殺されるということとは滅多にない。というよりほとんど全くない。日本の女性は、育てていくことができないと思うと、みんな喉の上に足をのせて殺してしまう。
- 45 われわれの間では女性が文字を書くことはあまり普及していない。日本の高貴の女性

は、それを知らなければ価値が下がると考えている。

47 われわれの間では女性に宛てて書く手紙に、それを書いた男性は署名をする。日本では女性に宛てて書く手紙に署名をすることを必要としない。また彼女自身も、自分の手紙に署名もしなければ、月も年も書かない。

49 ヨーロッパの女性は横鞍または腰掛に騎っていく。日本の女性は男性と同じ方法で馬に乗る。

50 女性のために騾馬の背の腰掛の中に座蒲団を置く。日本では高貴な女性のために馬の鞍の上に白い敷布を置く。

51 ヨーロッパでは普通女性が食事を作る。日本では男性がそれを作る。そして貴人たちは料理を作ることを立派なことだと思っている。

52 ヨーロッパでは男性が裁縫師になる。日本では女性になる。

53 ヨーロッパでは男性が高い食卓で、女性が低い食卓で食事をする。日本では男性が高い食卓で、男性が低い食卓で食事をする。

54 ヨーロッパでは女性が葡萄酒を飲むことは礼を失するものと考えられている。日本ではそれはごく普通のこと、祭の時にはしばしば酔っ払うまで飲む。

60 ヨーロッパでは女性は立ち上がって客人を迎える。日本の女性は坐ったままで迎える。

61 ヨーロッパの女性は人に見られずに道を歩くために頭巾を着ける。日本の女性は道を行く時、頭にタオルを冠り、その両端で顔の前を包みかくす。

第八章 馬に関する事

1 われわれの馬はきわめて美しい。日本のものはそれに比べてはるかに劣っている。

2 われわれの馬は走っていても、ぴたりと止まる。彼らのはひどくあばれる。

3 われわれの馬は臀しりに乗ることを許す。日本のは、そのように慣らされていない。

4 われわれの馬は一頭が他の一頭と並んで行く。日本のはいつも、一頭が他の後から行く。

5 われわれの馬は美しく見せるため尾を伸ばしておく。彼らのは、尾を結び。結び目を

つける。

6 われわれの馬のたてがみは、長ければそれだけ装飾になる。日本のはたてがみを切り、残ったものの中に所々、馬の威勢を大にするために、麦藁を結びつける。

7 われわれの馬はすべて釘と蹄鉄で装鋳する。日本のはそういうことは一切しない。その代り、半レグアしかもたない藁の^{サバート}沓を履かせる。

8 われわれの間では馬丁が手綱をもって先に進む。日本では、進んで行く道に従って、馬丁が馬のための藁の沓を担ってついて行く。

9 われわれの間で^{くつわ}馬勒には口の中に入れる ハミと小輪がある。日本では口を貫通する鉄があるばかりである。

10 われわれは馬に乗るのに左足を使う。日本人は右足を使う。

11 われわれの手綱は革製で大そうよく作られている。彼らのは布の帯で、彩色され、振られている。

12 我々は鞍と長い鐙だけをもつ。日本では短い鐙で膝をまげてしか騎らない。

13 われわれの鐙は鉄製で前が開いている。彼らのは木製で前が塞がり、モーロ人の沓のよう到大そう長い。

14 われわれは拍車を使う。彼らはそれを使わない。ただ非常に節の短い竹の鞭を使うだけである。